

尾前神楽における後継者育成の仕組みと課題

佐々木 昌 代

A Problem Concerning the Successor-training of *Omae Kagura* Court-Music-and-Dance

Masayo SASAKI

I. はじめに

尾前神楽をはじめて観たのは、平成12年の暮れ、宮崎県総合博物館が年末の恒例事業として行っていた夜神楽上演シリーズにおいてであった。その折りの胸を突く感動は、今以て、鮮明に脳裏に焼き付いている。白張の大きな袖をダイナミックに振り動かす懸命な舞から目を離せず、ビデオカメラをセットする時間すら惜しまれた。さらに、ぎっしりと埋めつくされた観客席の何処からともなく繰り出される神楽ばやしの張りのある伸びやかな声が、エネルギーに打ち込まれる太鼓の律動と相俟って美しいハーモニーを奏で、シンボリックに設えられた神屋で舞われる神楽を煽り際だたせ、博物館本館のリニューアル間もない清潔なホール（本来は民俗展示室）に神々しいばかりの雰囲気を漲らせていた。

胸の波動を使ってうねるように繰り出される腕の動きと、淀みなく踏み続けられる力強い足拍子に息をのみ、民俗芸能ならではの実直な反復に心地よい眩暈すら感じた。神がかつたと形容するのが相応しい見事な舞に、ひたすら感動した。そして、椎葉神楽への踏査は、尾前神楽から始めると心に決めた。

尾前神楽では、このように見事な舞を守り継ぐに見合った、巧みな後継者育成の仕組みが仕掛けられていた。それは、東米良の銀鏡神楽や尾八重神楽の「習い」、「格付け」、「持ち神楽」¹⁾といったことを念頭に尾前神楽の祭りや稽古に参加したのでは見逃してしまう、思いがけない仕組みであった。あらためて、無垢な状態で現地に臨み、特定の先入観など持たずに地域の人々の言葉に耳を傾けなければならないことも学んだ。

よって、本研究の目的は、聞き取る側の筆者が意図して引き出した言葉ではなく、できるかぎり語る側の地域の人々が溢れるように語った言葉を基に、尾前神楽における後継者育成の仕組みと課題を明らかにすると共に、尾前地区の人々の神楽を中心とした祭りと地域そのものにかかる思いを記述することにある。

II. 椎葉神楽

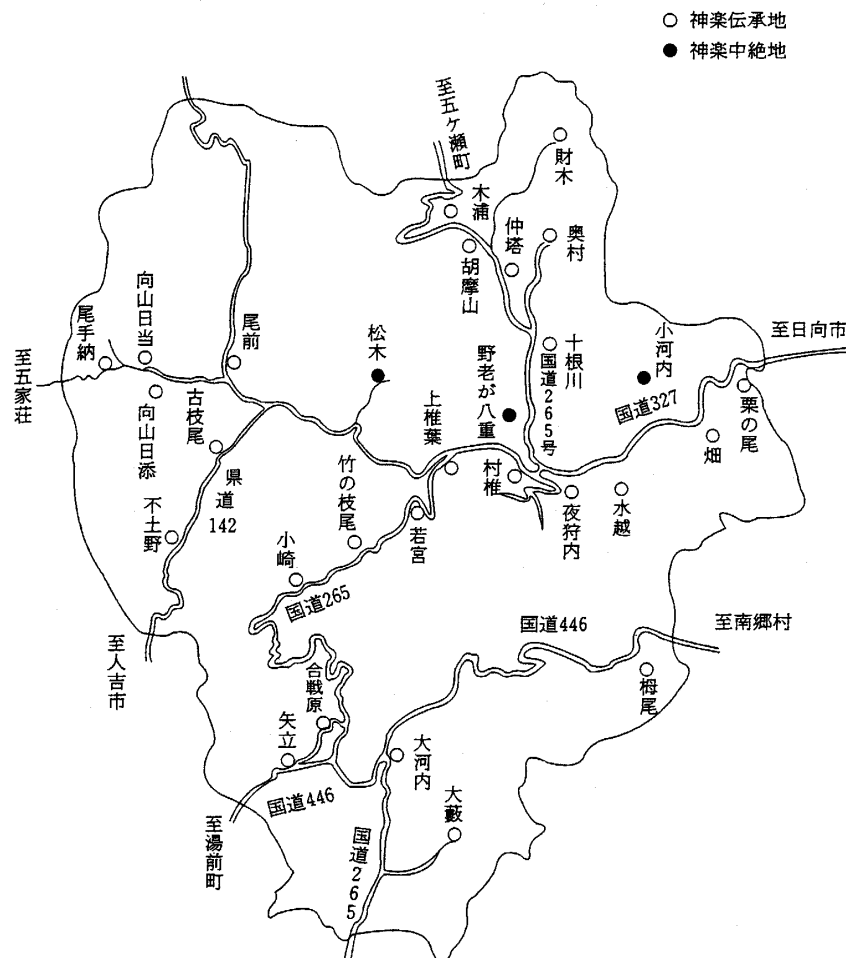
尾前神楽について記述する前に、椎葉神楽に触れておく。椎葉神楽は、宮崎県東臼杵郡椎葉村内

に伝わる夜神楽の総称である。椎葉村内には、次の4地区26ヶ所に上る集落で、等しいしきたりを持ちながらそれぞれ他と異なる特徴を具えた夜神楽が伝承されている。

- ・大字下福良地区（10ヶ所）
十根川 仲塔 奥村 財木 木浦 胡摩山 夜狩内 上椎葉 村椎 若宮
- ・大字大河内地区（7ヶ所）
梶尾 大藪 大河内 合戦原 矢立 竹の枝尾 小崎
- ・大字不土野地区（6ヶ所）
尾前 向山日当 向山日添 尾手納 古枝尾 不土野
- ・大字松尾地区（3ヶ所）
栗の尾、畑、水越

個々の夜神楽は、それぞれの集落名を冠して、例えば、十根川神楽、梶尾神楽、尾前神楽と呼ばれる。『椎葉村史』から引用した<図1>椎葉神楽伝承地一覧が示すように、これら26ヶ所以外に中絶中の集落^{注2}がある。

<図1> 椎葉神楽伝承地一覧



(『椎葉村史』850頁から引用)

椎葉神楽については、平成3年2月21日に国の重要無形民俗文化財に指定されているが、それに先だって行われた総合調査の責任者である本田安次が、「椎葉村は宮崎県の西北、熊本県に接している大きい村であるが、この村内25ヵ所に夜明かしの神楽が伝えられており、中絶中のものがなお数ヵ所ある。北の高千穂神楽と、南の銀鏡神楽には含まれた所であるが、同じ流儀ながらこれらには大きい異同があり、又25ヵ所夫々が全く同じではない。これも三河北信楽郡内20ヵ所に行われている花祭が、小異はあってもほぼ同様に演じているのとは異なる。即ち、分布がよほど古かったか、又、はじめ1ヵ所に伝えられてそれが分れたというのでは必ずしもなく、伝えた所が異なるものもあるのではないかとさえ思われる。何れも夜をとおす神楽であるが（数年に一度、特に盛大に催している所もある）、演目も33番というのを最多とし、地区によって区々である。願の神楽とって、特に申し込んで病氣平癒には限らず、木おろしの安全、牧場の災なきよう、又猪の豊猟などを願うところもあったが、一般的にはやはり丁重に神を勧請して、平安無事、延命息災を祈るものの如くである。「板起し」「御神屋ほめ」など唱言のみの曲もあるが、採物舞を主とし、これに面形の舞が加わる^{註3}。」と概説している。

椎葉神楽の特色は、『椎葉村史』、椎葉村教育委員会発行の夜神楽に関するパンフレット、民俗芸能辞典などの記載からまとめると、次のような内容になる。これらは、尾前神楽の特色としても当てはまる内容である。

- ・11月中旬から12月下旬にかけて一年を締めくくる「冬祭り」「年祭り」として執行される。
- ・民家を神楽宿とするのが本来であるが、神社の拝殿や公民館で執行する集落もある。
- ・飾り付けが入念である。内神屋、高天原（神籬）、外神屋の飾りに意が凝らされている。
- ・採物舞を主とする。採物を清める舞と、採物を依代とする神降ろしの舞がある。
- ・採物舞に、鬼神、荒神などの仮面の舞が加わる。
- ・語りものと結びついている。神の本地や採物の謂われを説く唱教が豊かに伝わっている。
- ・せり歌、ごやせきと呼ばれる神楽ばやしで祭りを盛り上げる。
- ・狩猟、焼畑などの民俗文化と深くかかわっている。
- ・猪の献饌、狩法神事など、山を隔てた米良神楽との類似性もある。
- ・神仏混淆の神楽として、近世以前の古態をよく残しているとされる。

椎葉神楽の伝承の現状については、夜神楽を観光資源として活用する立場にある椎葉村役場企画観光課商工観光係長の甲斐壽氏によれば、後継者が育って伝承が順調である地区と後継者が不足して伝承の危機に見舞われている地区の両極端があり、全体としては危機的状況にある地区が増えていくとのことである。

Ⅲ. 尾前神楽の概要

① 尾前地区

尾前地区は、椎葉村の中心地である上椎葉から上椎葉ダム、日向椎葉湖、耳川上流に添って狭く蛇行した谷間の道を15キロほどのぼった、熊本県との県境に近い山間の集落である。椎葉村内では上椎葉地区に次ぐ大きな集落で、土木工事と林業従事者が多い。戸数は80を超え、組内と呼ばれる小部落が組織されている。現在は、尾前上、尾前下、三方界、鶴の平の4つの組があり、

年毎の持ち回りで冬祭りを執行するための役割を担う。

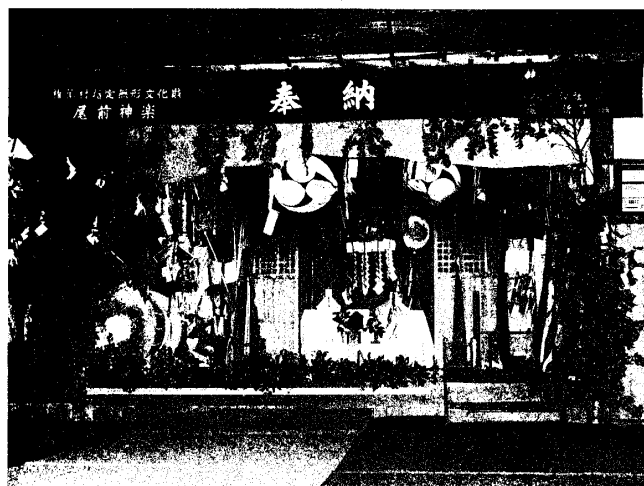
昨年（平成16年）、今年（平成17年）、2年続きで宮崎県に大型台風が襲来した際には集中豪雨の災禍によって交通通信網が遮断され、孤立を余儀なくされた自然環境の厳しいところであるが、甚大な台風被害を乗り越えて冬祭りを執行できる結束力と逞しさを持った地域の人々の絆が強いところでもある。

夜神楽の伝承地としては、高齢化、過疎化が進み後継者不足に悩まされている集落が少なくない椎葉村にありながら、尾前は若者のUターン率が高く、後継者がもっとも確保されているところである。尾前を筆頭に、向山日当、向山日添、尾手納の尾向4地区は、若い世代が地域に留まって夜神楽を受け継いでいるため、伝承については問題がないとみなされている。

② 祭りの執行

尾前では、12月の第2土曜から日曜にかけて冬祭りが行われる。祭場は、昭和33年に建てられた尾前神社拝殿である。本来は、民家を神楽宿としてデイと呼ばれる座敷に神屋を設けて行われていたが、宿主の負担が大きいことから、拝殿が建立された以降は、もっぱら拝殿奥の間口三間、奥行三間の一段高い板の間を神屋として神楽が執行されている。

神屋の周囲には赤の水引幕を張り回し、その綱に榊と紅白の御幣が交互に吊され、天井中央には雲として唐傘が広げられている。本来の雲は四角形であったが、昭和35年以降、かつて神楽宿を務めた民家の納屋から見つかった唐傘を大切に雲として飾るようになった。唐傘の柄には御幣や扇子などが下げられている。



神屋（尾前神社拝殿）



雲（民家の納屋から見つかった唐傘）

当日は、午前9時より清めの杯事をして御幣切りを始め、午後1時頃より六社山の尾前神社本殿に、宮司、氏子総代や地区の人々が神迎えに登り、本殿祭を行う。本殿祭では、「壺神楽」「大神神楽」「花の手」「扇の手」の4番が舞われ、お神酒と簡単な肴が参拝した一同に振る舞われる。本殿祭を終えると、太鼓を打ち鳴らしながら山を下って拝殿に戻り、神前に御幣などを納め、祭りの準備を整える。午後6時頃より祭典が行われ、神楽は午後7時頃より舞い始められる。翌朝9時前に舞い納め、直会となる。

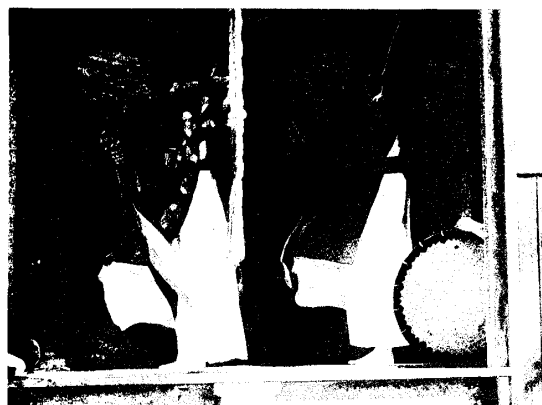
〈表1〉尾前神楽の神楽次第

番付	演目	人数	内容
1	板起こし	全員	神屋のシン祭りである。この後、神楽面を高天原に飾る。
2	<small>あんなが</small> 安永	全員	神屋がつくられた謂われを唱える。
3	<small>みこうやほめ</small> 御高(神)屋詞	全員	神屋の中の道具の謂われを唱える。
4	<small>おだりやめ</small> 御垂止	2	茶の子(百姓家で朝食前に仕事をするときの簡単な食事)に相当する舞。
5	壺神楽	2	始まりの舞。 <small>こうまきけ</small> 神前家の者が舞う。
6	大神神楽	2	尾前神楽の基本の舞。拝むともっとも効き目があるとされる。
7	花の手	2	榊を採物とする舞。この後、氏子総代などから挨拶がある。5～7番を式三番といい、これが済むと神楽ばやしを出してよいとされているが、本来は「森」を過ぎてからであった。
8	扇の手	2	扇子を採物とする舞。
9	幣の手	2	御幣を採物とする舞。
10	しめほめ*	2	注連をほめる舞。仮面の荒神と素面の呼び出し役(下舞といわれる)が向かい合って舞う。
11	森上	2	猟の姿を表す舞。獲物がたくさん捕れるように願い、手に弓を採って舞う。この後、弓通しが行われる。
12	森下	2	猟の姿を表す舞。獲物がたくさん捕れるように願い、手に矢を採って舞う。この後、神屋の御幣を取り換えるが、以前は観客が乱入して御幣をもぎ取った。
13	地割上	2	「地割」「地固め」はあらゆる神を集めて願い事をするもっとも重要なところとされる。世の中を広く祓い清めるために舞う。
14	地割下	2	
15	地固め	4	世の中を固めるために、伏せた太鼓を囲んで唱教を唱える。
16	<small>しょうごんどの</small> 生魂殿	数人	宝(御酒)を授ける儀礼。願主が宝を授かろうと次々に進み出て宮司と問答する。
17	泰平楽	**	宝を授けられた願主が客席を練って触れ舞う。この後、向山日当、向山日添、尾手納の3地区からそれぞれ舞の奉納がある。さらに尾向小学校に勤務して神楽を舞った経験のある先生のゲスト出演などもある。
18	手力	1	手力男の命の舞。宮司の家の者が舞う。
19	<small>ちんちかぐら</small> 鎮寿神楽	2	森を鎮める舞。鎮寿は鎮地、鎮守で、鎮寿の森とは神楽を祀った森のことである。

20	かんしん	4	台所の神に捧げる舞。剣を繋いでその下をくぐる岩くぐりがある。 ^{ないしゅう} 内集(台所)から舞い出て、舞い入る。
21	オキエ・ ごつ天王	4	唯一女形を取り入れた舞。伝承不詳とのことであるが、オキエは火伏せのために、ごつ天王は牛頭天王 ^{ごすてんのう} のことで疫病や災いを防ぐために舞うのではないかと思われる。
22	稲荷	2	人々の諸願を成就する稲荷神の舞。 ^{ごりやく} 御利益が大きく、お目出たいところでよく舞われる。
23	芝引き	4	岩戸開きの舞。
24	^{にちがつ} 日月の舞	2	五穀豊穡に繋がる舞。大豆を撒く。持ち帰って自宅の種と混ぜて蒔くと虫が付かないとされる。
25	火の神神楽	2	火の神を若返らせて食の恵みを願う舞。 ^{ないしゅう} 内集(台所)から火の神人形を持って舞い出す。共に乱舞する参拝者の顔に竈のへグロをつける。この間、宮司は竈で唱教を唱え、新しい御幣を納める。
26	神送り	全員	神に来年もよろしくと願い唱業を唱える。

* 願立をして願成就をしたい願主がある年には、外神屋を設け、「大神神楽」の次に「しめたて」として内神屋で舞ってから外神屋へ行きその周囲を巡って舞う。さらに「火の神神楽」の後に「しめたおし」として外神屋の周囲で再び舞う。

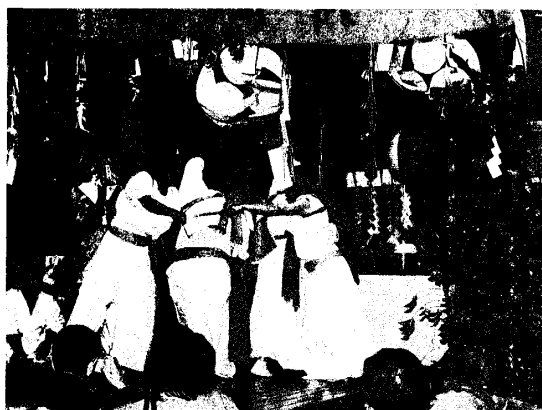
** 宝を授かった願主に続いて他の願主たちも共に舞うため、人数不定で、女性も加わる。
『椎葉神楽調査報告書第三集』「尾前神楽」を基に尾川源氏、尾前秀久氏の解説より作成。



本殿祭「言神楽」



本殿祭「花の手」



岩くぐり「かんしん」



一人に見えるように舞う「稲荷」

③ ならし

尾前神楽の稽古を「ならし」と言う。昼間に行われれば「日ならし」、夜間に行われれば「夜ならし」と言われる。日ならしは、神楽の担い手が農林業従事者から会社や役場に勤める者が主体となってからは、ほとんど行われなくなった。さらに、個人的に舞の技量を磨き上げるために行われる「家ならし」と言われる特別な稽古もある。神楽の演目によっては「家持ち神楽」として舞える家が決められていた頃に、家毎に、父から子へ、父から子や孫へ徹底して舞が仕込まれた稽古などがこれに相当する。

前神楽太夫の尾川源氏によると、20年くらい前まではならしも祭りと同様、地区の民家を宿^{註4}にして行われていたそうである。祭りの前の1週間程度、民家を回ってならしを行っていた。これを「宿まわし」と言い、酒を酌み交わしながら、神楽の練習よりもその自慢話に時間を費やすような稽古であったため、「飲み泊まり」と称して自宅には帰らずにそのまま次の宿へ回るようなこともあったそうである。したがって、師範が示されて正確に指導して貰えるというようなことは少なく、「難儀して、口楽（太鼓の拍子を口ずさむこと）で必死になって身に付けた」「太鼓の音だけ覚えておいて、段ボール箱を打って練習した」と源氏が苦笑いしながらその頃のことを語ってくれたが、盗み見て習得していくというような厳しい稽古であった。それだけに、身に付けた舞や太鼓打ちの技術には間違いのない腕前を持っていたとの自負も、源氏の苦笑いには滲んでいる。

現在のならしは、「ならし」という言葉には拘っていないが、やはり冬祭りの前の1週間、尾前神社拝殿で午後7時頃から夜半近く、ときには夜半過ぎまで行われる。稽古は、基本的には、神楽を演目毎に一通り舞い、舞い終える毎に指導を受けるという手順で、観て覚え、舞って身に付けるというやり方で進められる。

吐く息が白く見える厳しい寒さの中、ならしが行われている拝殿に一步足を踏み入れると、噓せ返るような熱気に頬が上気する。祭りの神屋となる拝殿奥の板の間では、手割に従った組み合わせで、太鼓の拍子に乗って本番さながらの舞の稽古がなされる。祭りの客席となる畳の上では、板の間の舞に合わせて稽古するグループもあれば、互いの動きを修整し合って何度も同じところを繰り返し舞っているグループもある。先輩格の舞を黙って凝視する者もいれば、これでよいのだろうかと首を傾げつつ一人で黙々と舞う者もいる。

尾前神楽のならしでは、肅々と座の秩序に添って稽古が進められる東米良の銀鏡神楽などの習いとは異なり、一人一人の練習のやり方が尊重されて稽古が進められる。神楽を伝承しようとならしに臨む後継者に大きな自由が認められているように思われるが、懇切に手取り足取り教えて貰えない稽古に変わりはなく、あくまでも後継者の主体性が験される稽古である。単に神楽を上手に舞うことが期待されているのではなく、地域の象徴である夜神楽を継ぐに相応しい者として、地域社会に自ら進んで貢献しようとする後継者の育成こそが企図されているからである。

④ 神楽子会

夜神楽の後継者即ち神楽の舞い手のことを、尾前では神楽子と呼び、神楽子会を組織している。現在、27名が会に所属して神楽継承に励んでいる。会を統括して、神楽子の指導に当たっているのは、神楽太夫の尾川亀次氏と尾前神社宮司の尾前秀久氏である。亀次氏は、手広く土木建設業

を営んで地域の若者を大勢雇用している。秀久氏は、宮司として尾前地区の精神的支柱であると共に、椎葉村の教育委員長を長年に渡って務めている。両氏は、神楽の技量や指導力は問うまでもなく、地域の人々から椎葉村の指導者、牽引車として一目置かれる存在である。そのような誰からも尊敬を集める人物が、当然の如く、神楽の師匠、統括者として認められてその地位を占めるのだと、若い神楽子が説明してくれた。

戦前までは、神楽子になることが許されたのは各家の長男だけであった。所謂、長子相伝ということではなく、跡継ぎではない次男や三男に神楽を教えても他所へ出ていってしまうので、長男に限っていたということである。戦争中に次男や三男にも教えておかなければ立ちゆかない状況に見舞われたことを経験して、今は神楽子になる制限は設けられていない。

神楽子会は、20代、30代の若い世代が中心である。足拍子を淀みなく踏み続けながら絶え間なく袖を振り動かす尾前神楽の舞は、体力のある若い神楽子でなければ舞い切ることができない神楽であるし、元気旺盛な若い世代が舞ってこそ見栄えがする舞も多い。そのために、現役の神楽子として祭りで神楽を舞うのは45歳ぐらいまでである。地域の過疎、高齢化が進んで若い舞い手を確保することができなくなった地域では、やむなく、若者が務めるべき舞を50歳過ぎのベテランが代わって舞うようなことも少なくない。それに引き換え、尾前では、旧来通り若い世代が中心となって神楽を担い、祭りを執行している。しかも、そのことがますます、若い神楽子の確保に繋がり、地域に若者が戻り留まる要因ともなっている。

また、尾前地区にある椎葉村立尾向小学校に勤務している先生方を神楽子の一員として受け入れている。先生方は、小学校の子ども会活動¹⁵の一環として行われている、椎葉村の子ども郷土芸能発表会や地区の冬祭りに向けた神楽の稽古で、子どもたちと共に舞を習い覚え、冬祭り前のならしで、神楽子と一緒に汗を流して舞を仕上げる。尾前神楽本番に臨んでは、地区の神楽子と同じ立場で祭りを盛り上げる。家族として小学生の子どもを伴って赴任してきた場合は、親子で神楽を舞うこともある。さらには、尾向小学校を離任した後も、冬祭りの夜にはるばるやって来てゲスト出演したり、転任先の宮崎市内などの小学校で総合的な学習の時間に神楽を指導したり、尾前神楽一行を招聘して子どもたちに本物の神楽を観る機会をつくったり、神楽に取り組む活動を継続している先生方も少なくない。

IV. 後継者育成の仕組み

神楽の原点は、人間を育てることにあるとされる。尾前では、昔からそのことが意識されていたので、祭りの手割は、観客が多いときに新人が舞い、観客が少なくなる朝方に師匠級の者が舞うことになっている。どんなに初心者の神楽子も、満場の観客に注目され、声援や拍手を浴び、ましてや神楽ばやしがかかろうものなら、どんなに疲れを覚えていても頑張っ舞い続けることができるという。逆に、ベテランの神楽子は、観客が多い少ないに関わらず、祭り終盤の大事な神楽を舞えることを名誉として立派な舞を披露することを目指す。

よって、もっともお客さんが詰めかける式三番の終わった雰囲気の良いところで、子ども神楽が奉納される。子どもたちが舞うときは、客席が埋まるだけでなく、観ている者全員が子どもたちを注視する。客席の後方から撮影したビデオを再生すると、神楽の演目によっては、互いに歓談して

いたり、お神酒がまわってうたた寝していたりして、観客の頭部はあちらこちら勝手な方向を向いているが、子どもたちの「舞の手」²⁶が奉納されているときだけはみんなの頭が神屋に正対している。あれだけ大勢に集中して視線を向けられると、子どもたちでなくても一生懸命に舞わずにはおれない。

一生懸命に舞う子どもたちの姿には、観客も感激してさらに注視して大きな拍手を送り、ご祝儀の蒔銭を次々と神屋に投げ入れる。感極まって目を潤ませるお年寄りもいる。そのように感激して見つめられると子どもの心が大きく育つのだという。椎葉村の教育委員長でもある秀久宮司が「地域全体が子どもをじっと見つめる機会があると、子どもが否応なしに真っ直ぐ育つ」と解説する。子育てにおいては、子どもをみんなで注視すること、褒めるときはしっかり褒めること、叱るときはきっちり叱ることが大切であるが、昨今の都市化した地域社会ではあまり見かけなくなった。しかし、尾前では、子ども神楽を一つの契機として、地域の子ども一人一人を地域の大人みんなで見つめ、みんなで育てていくということが自然になされているのである。

そして、神楽子には、子どもたち以上に地域全体の期待のこもった視線が注がれる。地域の人々は、まずは祭りにおいて、声援や神楽ばやしをかけて舞を奮い立たせながら、神楽子一人一人の神楽の腕前がどれくらい上がっているかを見極める。その上に、普段の生活において、懸命に神楽を披露して祭りを盛り上げた如く、地域社会の構成員としてどのように地域を盛り立てるための役割を果たしているかを期待をこめて見守る。そのために、神楽子会が若い世代中心であるように、尾前の地域社会そのものが若者中心で機能していくように配慮されている。「生活が楽で、老人だけでも生活していけるから過疎になる」「若い者がいないと困るから、親が子を連れ帰る」との考え方で、尾前では地域の主導権をできるだけ若い世代に委ねることが進められている。まったく、尾前には前項までに述べたように、深刻な過疎、高齢化の影はなく、若者の姿が目立つ。若者が留まっても嫁の来てがないというような寂しい状況にもない。特に、神楽子は、神楽の習得過程で自ずと身に付いた言動によって、ひととき目立つ存在として地域の人々の注目を集め、注目されることによって大いにやる気が引き出され、地域の人々の期待に応えているそうである。例えば、神楽子を中心に結成されている尾前地区の消防団は、椎葉村の競技会において、常に抜きん出た成績で優勝旗を持ち帰るとのことである。

このように、尾前には、神楽の伝承と祭りの執行を中核とする、地域全体での子育てと若者が地域社会にUターン²⁷して定着するための仕組みが伝統的に保持されている。この仕組みが巧みに仕掛けられていると思われるのは、昔ながらの仕組みが今もって有効に機能していることと、仕組みの評価者として地域の年寄りたちが据えられていることである。即ち、若い世代が正しく神楽を継承すると共に地域に貢献していく人間として成長しているか否かを評価できるのは、直接指導に当たっている亀次太夫や秀久宮司のような熟年世代ではなく、かつて神楽子であった源前太夫のような地域の年寄りたちだけであるとの共通認識があるのである。

尾前神楽の後継者育成の仕組みは、地域全体に注視されて真っ直ぐ育つ子どもたち、地域の前面に押し出されて逞しく成長する若者たち、実質的に地域社会を支えている熟年世代、地域全体に目配りをする年寄りたち、すべての世代に渡って仕掛けられている夜神楽伝承のための仕組みであり、尾前地区の人材育成のための社会文化的装置である。

神楽の伝承と祭りの執行は地域の人々の強い絆によって支えられているが、同時に、地域の絆は

神楽伝承と祭りによって再確認され、強められてもいる。夜神楽の後継者育成の仕組みは、取りも直さず、地域社会の後継者を育成する仕組みであって、「ならし」「習い」といった舞の伝承過程の場限定して見極められることではないことが、あらためて了解できた。

V. 後継者育成の課題

椎葉神楽の中でも、後継者が育って神楽伝承が順調である地区の最右翼にあげられる尾前神楽においても、時代の趨勢によって、考慮せざるをえない課題がある。

① 尾前神楽だけでは生き残れない

宮崎県内の神楽がその豊富な伝承数によって内容の豊かさを保っているように、椎葉神楽においても、夜神楽を伝えている集落が26ヶ所にも上るということに意味がある。同じ椎葉村内で等しいしきたりを持ちながらもそれぞれに他と異なる特徴を具えた夜神楽が数多く伝承されているからこそ、互いに競いが生まれ、次の世代に受け継ごうとする強い思いが湧き出て、夜神楽の数と共に質も維持されるのである。ところが、伝承が堅調な集落と衰退が危惧される集落との格差が広がりつつある現在の椎葉神楽にあっては、競いが有効に作用せず、伝承が堅調とされる集落にもマイナスの影響を及ぼしかねない。のみならず、神楽の危うさは伝承地の危うさであるから、椎葉神楽が拠って立つ椎葉村自体の将来についても少なからぬ不安がある。尾前神楽もそのような影響や不安から完全には逃れることができない。

② 神楽ばやしの衰退

祭りとは先人たちが残してくれた大切な教えそのものであって、地域の人々が皆で心と力を合わせて一つのことを成すことに本旨があると、尾前では捉えられている。よって、神楽の披露においても、舞う者と観る者とが共に楽しみ、祭りを盛り上げることが求められる。神楽子は懸命に神楽を舞ってみせる。観客は神楽ばやしをかけて神楽子を励まし、互いに神楽ばやしをかけ合って交流する。さらに、神楽子が観客の神楽ばやしに応じて舞を昂揚させる。神楽ばやし飛び交って舞処の神屋と客席に一体感が出るまでに熱気を帯びてこそ、勧請した神々も楽しまれ、願いも聞き届けられるとされる。しかし、残念ながら、最近の祭りでは一体感が出るまでに神楽ばやし飛び交うことは少なくなった。

<表2>に示したような神楽ばやしは、口伝えによって自然に唄い継がれてきたもので、民謡で鍛えた自慢ののどを持っている者も多い50歳代以降の世代は自在に唄うことができる。それより若い世代にとっては、昔ながらのはやしの内容や節回しは分かり難く、違和感がある。

「神楽ばやしが出なくなった」という声はどこの夜神楽でも聞かれることである。尾前神楽ではまだまだ神楽ばやしが出される方であるが、若い世代にも受け継がれるような神楽ばやしもしくはそれに代わるものが望まれる。

＜表2＞尾前神楽の神楽ばやし

1. 御神屋に、ただ白紙と拝むかよ、えりて下ぐれば、神の姿なり。
2. 御神屋に、へいたるしゅめは、神のしゅめ、心のしゅうめと神は申すなり。
3. 天じくの、社団の下より、出ずる水や、すいしょう南へ、流れ行くどうか。
4. 雪降れば、木の又ごっちに、ひとぎつんでや、向かえのカラスが、どっと喜ぶぞ。
5. 谷下り、ほかけて走るうなぎまらんや、すまづまごさげば、へこもたまらんぞ。
6. うぐいすが、梅の小枝に、昼寝して、花の咲くのを、夢にこそ見る。
7. うぐいすが、梅の小枝に、昼寝して、花を枕に、葉をござに。
8. さえは雪、こまは霰、里は雨んや、何とて雲にも、へだてがあるどうか
9. わが国は、神の末なり神まつる、昔の手振り、わするなよ夢。
10. 若い衆が、鈴振りたてえ舞うときは、八十婆様もよこちよに舞いはてる。

—以下は節が違います—

11. 出ればそびきこめ馬屋のすみへ、馬屋のすみではすぼがつく、すぼは互いに落とし合う。
12. 神楽舞うちゅうて人寄せて、舞わにや舞子の恥となる。
13. 今夜させんぼぼそやの木ぼぼよ、明日腐れてなばはゆる、
なばはえてもろくななばはえぬ、猿の腰掛けか、毒なばか。
14. 是が一じゃろ名取りじゃろ、名取女子のぼぼの毛の長さ、前の銀杏の木三重回る。
15. わじよも来たかよ俺も来た、俺とわじよとはいとこどし、
いとこどしじゃろ似たごたる、いとこ名乗りは、ばかがする。
16. おどまもどるが、つれしゅはないか、つれしゅ後から籠で来る。
籠で来るな、つれしゅはもつな、唄で来るよな、つれしゅもて。
17. 今夜一夜は、お泊まりなされ、明日の晩から、籠の鳥、
籠の鳥じゃと、悔やむな泣くな、籠の戸の開くせつもある。
18. 雨も降らんのに、笹山越えて、笹の露やら、涙やら。
19. 神楽見に来て、寝るよな奴は、頭こくらせ、火のとぎで。
20. 神楽出せ出せ、神楽出せ、神楽出さなきや、お神酒出せ。
21. 是ほど舞うのにはやすもなおらんか、はやすもなおれども目で見ればかりよ。

尾前神楽の参拝者に配られる「神楽はやし唄」から作成。

③ 神楽宿が望ましい

尾前神楽の舞は、民家を神楽宿として、デイの間に設えられた神屋で演じられてこそ本来の雰囲気醸し出され、観る側にその迫力ある魅力が十分に伝わるのではないかと思われる。上体を巧みに燦らせながら前後左右に弧を描いて大きく袖を振り動かす尾前神楽ならではの舞の舞処は、祭壇を除く三方向から舞を観ることのできる神楽宿で設えられる神屋が望ましい。現

在の尾前神社拝殿に設えられる神屋では、額縁舞台のように正面一方向からしか観ることができず、尾前神楽の舞を堪能し切れないもどかしさを覚える。

舞処の神屋と客席が正対していると二つに分割される印象があるが、神屋を取り囲むように客席が設置されていると、神楽を舞う側と観る側が融和しやすい。神楽ばやしが出される場合も、まさに神屋で舞われる神楽を挟んでのかけ合いとなる。宿主の負担を考えると容易なことではないが、ときには神楽宿のデイの間を神楽の舞処として祭りが執行されるようになることが望まれる。

これらは、尾前神楽の後継者育成の課題として、緊急に対応しなければならないことではない。むしろ、若い世代が地域に多く留まり、神楽の後継者も確保され、舞や太鼓打ちの技術も支障なく伝承されているからこそ指摘できる課題である。宮崎県総合博物館での強烈な感動が忘れられず、尾前神楽の舞に魅せられて尾前の冬祭りに足を運び続けようとする者が、尾前神楽の未来を背負う尾前地区の若い世代に意識してほしいと願う課題である。

VI. まとめ

夜神楽を継承している地域は、多かれ少なかれ、過疎や高齢化に見舞われて神楽の後継者育成の前に、地域の将来を託すべき若者が残っていかないという悩みを抱えている。しかも、そのような悩みを解決する有効な手立てを見出せず、消極的な対策しか講じられない夜神楽継承地域が少なくない。ところが、尾前神楽では、まったく逆の現象が見られた。昔ながらに夜神楽の伝承と地域の絆を守ることによって、若い世代が極々普通に地域に戻り留まっている。よって、今後も尾前神楽についての調査を継続して、後継者不足に苦慮している地域の参考となるような具体的な資料を導き出せるよう努力したい。

調査継続に当たっては、もっとも記述したいと考えながら、ならしの観察調査が不十分であったために割愛した舞の特徴とそれに関わる伝承過程についても、明らかにしていきたい。可能であれば、尾向小学校の先生方のようなゲスト出演の場合には女性も舞うことが許されているということであるので、神楽子のならしに加わり、実際に祭りの神屋に立って、夜神楽の伝承過程を内側から参与観察する機会を得られればと思う。

最後に、調査に快く協力して下さった神楽子の方々、取り分け、時間をかけて貴重な話を聞かせて下さった尾前神楽の前太夫尾川源氏、現神楽太夫尾川亀次氏、同子息尾川奉行氏、尾前神社宮司尾前秀久氏に深く感謝申し上げます。

注

1. 主要参考文献9)
2. 椎葉神楽保存連合会には27地区が加盟している。『椎葉村史』では中絶地とされている松木地区が休止中の神楽として加わっている。また、椎葉民俗芸能博物館が毎年広報している「椎葉神楽日程表」にも27地区が紹介されている。松木神楽も、平成13年度日程表によれば、神楽が執行されている。なお、それぞれの地区名、神楽名については、例えば、竹の枝尾を嶽之枝尾、尾手

納を追手納、畑を畑・鳥の巣等々、資料によって表記が異なるため、本稿では『椎葉村史』に従った。

3. 主要参考文献1)148頁より、旧字体を新字体に改めて引用。夜神楽の伝承地が25ヵ所となっているが、若宮神楽が中絶中とされている。
4. 自宅を祭りの神楽宿とするのと同様に、ならしの宿として提供することは名誉なことであると共に家を葎い清める「家払い」になるとされる。
5. 椎葉村内の他の地区では、子どもたちへの神楽指導は神楽保存会の活動の一つとして行われているが、尾向地区では、小学校の教育活動として位置づけられている。
6. 子ども神楽には、尾前神楽の基本とされる「大神神楽」が相応しいが、鈴と共に御幣を採物とするために子どもの数が増えると御幣切りの準備に手を取られるので、舞が同じで扇子を採物とする「扇の手」の方が準備が容易なためであるとのこと。また、扇子を採物とすると、手の方に意識がいった足が疎かになる難しさが、子どもたちの稽古の励みにもなるようである。
7. 尾前地区の子どもたちは、尾向小学校を卒業すると、親元を離れて椎葉村立椎葉中学校での寮生活に入る。さらに高校進学後は、椎葉村内に高等学校がないため、必ず村外に出なければならぬ。

主要参考文献

- 1) 本田安次『日本の伝統藝能 神楽Ⅱ』（本田安次著作集第2巻）錦正社、1993年。
- 2) 藝能史研究会編『神楽』（日本の古典芸能第1巻）平凡社、1969年。
- 3) 椎葉神楽記録作成委員会椎葉村教育委員会『椎葉神楽調査報告書第一集』1982年。
- 4) 椎葉神楽記録作成委員会椎葉村教育委員会『椎葉神楽調査報告書第三集』1984年。
- 5) 椎葉村『椎葉村史』1994年。
- 6) 民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房、1993年。
- 7) 山口保明『宮崎の神楽』鉾脈社、2000年。
- 8) 渡辺保『日本の舞踊』岩波新書、1991年。
- 9) 佐々木昌代、根上優「神楽伝承における後継者育成の仕組みと課題－銀鏡神楽と尾八重神楽から－」『生涯学習研究』（宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要）第8号、2003年。